

逢ひにゆく八十八夜の雨の坂

藤田湘子

恋の句、と思っていた。「会ひに」ではなくて、「逢ひに」であり、素直に読めば幸せな逢瀬の句である。「八十八夜」「雨の坂」と具体的な時と場所が提示され、むつとした晩春の夜気はどこか陰鬱な気分をかもし出す。諸手を上げて喜べる恋ではないような気がする。

同時期の作に「愛されずして沖遠く泳ぐなり」があり、いずれも恋の句として読まれることも多いが、その背景には青年湘子の苦悶があった。師、秋櫻子の勘気にふれ、側近の場を離れ、気にかけてくれた波郷の家に足繁く通っていた頃である。そして、氷解したあとには師の元にも頻繁に「逢ひにゆく」ことになる。師弟の間の揺曳する気分を感じさせる句でもある、と思つた。